

# Ding-Dong

緑の芝生の上に建つ白いチャペル。

高い窓 ステンドグラスが光を染め分ける。

鐘が鳴る 祝福の鐘が――

クラシカル・スタイルの裾を長くひいた純白のドレス。

しなやかな身ごなしで花嫁はヴァージン・ロードを進む。

父親代わりの男性に付き添われて、花婿のもとへと。

チュールのベールごしに見える象牙の肌、珊瑚の唇

その横顔はジョーカー――

「行かないでくれ！」

自分の叫び声で六道リインは目が覚めた。

夢だったとわかったあと動悸がおさまらない。

(間違いないジョーカーだったよな。付き添っていたのはS

Aだ)

自分が見ていた夢をなぞる。

花婿の顔は思い出せない。

いや、そうではない。リインは、花婿の顔を見なかったのだ。見たくないと願ってしまったせいだ。

それでも、自分ではないということだけは確実だ。

ヴァージン・ロードを進むジョーカーをみていることだけしかできなかった。

(嫌な夢……まさか、正夢なんてことはないだろうな……)

リインは、自分に予知能力があるとは思わない。

夢で見たことを現実と混同するようなタイプでもない。

たしかに夢には現実が投影している。精神分析にも利用されることからわかるように、心の秘密を解く鍵でもある。

だが、今の夢は、願望の投影ではない、と思う。

(でも……)

ジョーカーを見も知らぬ男に渡したくはないと思う一方で(寿退職が認められることは、解体処分を免れたってことでもあるんだ)

相手が自分ではないのは悔しいが、このことでジョーカーが幸せになれるのなら――解体処分を免れることができるのなら、それを喜ぶべきかもしれない、とも思う。

とにかく、今しがた見たものは夢であり、リインの現実たる日常は、彼が思索に耽る暇など与えてはくれない。

『出勤十五分前！出勤十五分前！』

遅刻防止のためにセットしたアラームが、合成の音声でリインを急き立てる。

「いけない！今日は、トーキョー・コレクシヨンの警備だ」

彼は今日、『トーキョー・コレクシヨン』と呼ばれる大掛かりなファッシヨン・シヨウの警備責任者として、シャーロキアン・システムの運営にあたることになっている。

元々は、警備システムも犯罪予測プログラムも飛騨ジェンクスの頭脳が生み出したものだが、その飛騨が月を離れられないため、リインが責任者として警備に赴くのだ。

\* \* \*

トーキョー・コレクシヨンの舞台裏はセミヌードのモデルたちでいっぱいだ。セミヌードどころかオールヌードも存在する。

彼女たちは、デザイナーの意図によっては、下着を着けないことを要求される。それに、短い時間で着替えて、ステージに出て行くためには、一番効率のいい場所で着替えることになる。そのことに慣れているため、男性がそばにいても頓着しない。恥らっていないのは仕事にならないのだ。

だが、ラインのほうは目のやり場に困ってしまう。顔を赤らめて眸をそらすさまがおかしいとモデルにからかわれる。彼女たちにすれば、ラインの様子が「かわいい」ということらしい。

(ドギマギしてちゃ、仕事にならないよな)

仕事にきているのだから。  
ラインが派遣されたのには、二つの理由がある。一つには、毎年のことながら、あまりの人数の多さから、事件や事故が多発するということ。二つめは、今回のコレクシヨンはテロの標的になる危険性があるということだ。

発表されるコレクシヨンの政治的、あるいは宗教的なメッセージがあるなどとは、ラインには思えないのだが、人の考え方というものは、千差万別だから、狙っている人物がいるという情報が入れば、警戒しないわけにはいかない。

自然発生的な事故は仕方がないとしても、テロは防がなくてはならない。

ラインは、予測プログラムに基づいて警備スタッフに指示をだしながら、次々と発表されるコレクシヨンを視野の端でとらえていた。

(そろそろラストだな...)

シヨは順調に進んでいると見えた。

にわか仕込みの知識によれば、シヨの最後はウエディング・ドレスというのが定番らしい。そして、今まさに舞台奥から白いドレスを着けたモデルが歩みだそうとしていた。手には清楚な白いブーケ。

ドレスに留めつけられたパールの上品な光沢。

ドレスそれ自体のシルクの艶やかさ。

華やぎと落ち着きと幸福感がうまく表現されていた。

エスコート役の男性に導かれて、舞台のターン位置まで歩を進め、振り返ったそのモデルは――

(ジョーカー!)

ラインはもう少して叫び声をあげるところだった。

モデルは紛れもなくジョーカーだった。

(きれいだ♥)

一瞬、仕事を忘れ、うっとり見つめる。

(大昔の映画のシーンに、花嫁をさらって逃げるつてのがあったっけ...)

ぼんやりと考えたラインの身体がふわりと宙に浮いた――宙に浮いたかのごとくにジョーカーが彼を抱きかかえていた。ウエディング・ドレスのジョーカーが、女性の姿のまま、ラインを抱えあげていたのである。

「うふ♪」

いたずらっぽい微笑を浮かべると、ジョーカーは客席に飛び降り、そのまま出口へと向かう。

(……)

リインは、咄嗟になにもできない。

ステージ上では、男性モデルが何か白い箱のようなものを掴みだし、力任せに引きちぎった様子がチラリとリインの目に映った。しかし、それもほんの一瞬のことで、もっとしつかりと見ようと思った時には、ジョーカーは会場の外に走り出ていた。

あまりといえばあまりの成り行きにリインは言葉もない。

だが、状況は不幸ではない。むしろ幸せだ。

立場が逆だという思いはあるが、言うべきではあるまい。

会場内では、大きな騒動になっていることだろうが、それも今は問うまい。

今朝の夢は、このことを暗示していたのかもしれない。

(ジョーカー♥)

リインは、抱き上げられた状態のままジョーカーに口づけた。

少し後――

二人の姿は樹上にあつた。

会場になっていたイベントホールのほか、周辺にある建築群をも見渡せる小高い丘のうえ、バオバブの木を模した合成樹木の幹に。

二人は太い幹に並んで腰かけている。

「ねえ、ジョーカー、大丈夫なの？こんなふうにショーを抜

け出したりして……」

リインはとりあえず尋ねてみた。

ジョーカーがモデルのアルバイトをしているなんてありえない。理由があるからこそモデルに扮していたのだ。このあとまだモデルを続ける必要があると、困ることになる。

「ええ、大丈夫。リインのほうこそ大丈夫ですか？お仕事中だったんですよ」

警備責任者が途中で行方不明になった、というのはすでに署に報告がいつてるだろうから、のちほどこつてりと絞られることにする。

何はともあれ、ショーは無事(?)に終了し、テロは発生しなかった。それだけが事実として残る。

「僕も大丈夫だよ。ジョーカーは……」

「ウェディング・ドレス、似合ってます？もちろん、これを着たのは任務だけど、リインに見てもらえてよかった」

そこで一度言葉を区切ると、そつとリインの頬に口付けた。そして独り言のように続ける。

「舞台上に小さな目印が付いていたのを見たでしょう？出演者にはターンの位置の目安だと説明されていたけれど、本来なら必要のないものなんです。プロのモデル達は自分がどこでターンすべきか、ちゃんとわかっていきますから。」

あれは、爆弾のスイッチだったんです。取り外すことができるなら、それが一番簡単だけど、スイッチが入るより先に取り外すとすれば、即座に爆発する仕組みになっていました。スイッチが入るのは、あれを踏んだ時かショーが終了した時、そのどちらか早い時点で爆発するようにプログラムさ

れていた。そして、わたしが踏み、スイッチをいれた」

「でも、爆発は起こってない」

リインはかみ締めるように言った。

「そう、踏んでから十秒後に爆発するようにセットされていたんです。そして、一度スイッチが入ったあとなら、起爆装置を外すことができる——十秒で全てを解除できるだけの能力があれば」

「じゃあ、ジョーカーと並んで歩いていたのは……」

リインの夢と同様、S・Aだったのだと今わかる。

変装したS・Aがモデルとしてジョーカーをエスコートし、起爆装置が作動した瞬間にそれを引きちぎって爆発を阻止したのだ。『解除』というにはあまりにも力技に過ぎるが、最初から解除コードなど存在しなかったのだろう、とリインは思った。

「それにしても、十秒……」

もつと他に方法はなかったものか、とつい考えてしまう。

万一タイムリミット内に解除できなければ、会場にいた人々は、みな巻き添えをくらうことになるのだ。

もちろん、ジョーカーもS・Aも十分な勝算があったからこそ、その方法を選んだはずだし、他に良策があればベターなほうを選択するに決まっている。

そのことを誰よりもよく知っているのもリインだが、十秒というのはあまりにもギリギリの時間ではないか、という気がする。

「十秒あれば人間は百メートル走ることができるんですよ」  
ジョーカーは、トレーニングを積んだアスリートにのみ可

能な例をあげた。

（ああ、そうなんだ、ジョーカーにとっては……というか、特捜司法官にとつての十秒と僕たち普通の人間にとつての十秒というのは違うんだ。人は十秒間に百メートル走れる、とジョーカーは言うけれど、ジョーカーにとつての百メートルは、もつとずっと短い時間なんだよな）

だからこそ、十秒あれば、十分に余裕をもって解除できると判断したわけだ。

リインは今更のように能力や感覚の違いを思う。

究極の合成人間たる特捜司法官と普通の人間との間に抜きがたく存在する能力や感覚の違い——どれほどにトレーニングを重ねても到達すべくもない高い能力。能力に裏打ちされているが故の余裕。高い能力であるが故の命の期限。

そのリインの心のうちを知ってか知らずか

「私はショーに穴をあけたわけですから、もうモデルとして使ってもらえませんね」

ジョーカーは小さく舌を出し、肩をすくめた。

その様子は、本当に残念がっているように見えた。

（こういうところは、普通の女の子なんだ）

リインのほうから、今度はゆっくりとキスをした。

（やっぱりジョーカーも最新ファッションを身につけたいのかな……ウエディング・ドレスだけは僕のためであってほしいんだけど、次にデートする時には、ブラウスでもプレゼントできるといいな。ドレスなんて僕の給料じゃ無理かもしれないけれど、ブラウスくらいなら……）